黒人研究学会会報

Japan Black Studies Association Newsletter No.82 (September 30, 2016)

第82号　２０１６年９月３０日

例会発表要旨

４月例会　２０１６年４月２３日　立命館大学朱雀キャンパス

① ゴスペルについての東洋的解釈の試み

山下　弥生

東洋的解釈とは、東洋的尺度、つまり、仏教や禅にみられるような一元的な発想・見方・考えかたをもってものごとを検討することである。例えば「本当の自分」であれば、他人との比較に基づく相対的、二元的な自分ではなく比較を超えたところにある絶対的な「一なるもの」を本当の自分と考える。これは西洋中心の歴史の中では正統から外されてきたが東洋世界では伝統的に親しまれてきた見方・考え方であるが、東洋のみに限定されるものではない。

ゴスペルについての研究者の関心の一つは、聴く者を強く感動させるゴスペルの力強さの源である。その答えは主に音楽的なルーツと奴隷体験に求められてきた。さらにここで彼らの一心に歌う姿に注目すれば、その態度は禅において本来の自己を求める求道者の姿を想起させる。換言すれば、黒人たちの心の有り様が禅で求めるそれと通底するのであれば、ゴスペルは本来の自己の現れと考えることができ、そういう根源的なところから出てきた歌が人の心を感動させるのに何の不思議もない。

ゴスペルと禅に共通する心の有り様が認められるかどうかを検証するために、禅の教えを示す十牛図にゴスペルの歌詞を照らした。その結果、おおまかではあるがゴスペルの歌詞と十牛図の各図を対応させ、黒人たちは歌を歌うことを通じて段階的に境涯を深めながら本当の自分を見つけていったことを示した。ゴスペルはアフリカ起源とアメリカの奴隷体験に加えてそこから複合的にうまれた禅に通ずる精神性によって、より深く独特な力強さとなった。

② ヒップホップは重要である、が誰にとって？　―　ラップ消費と評価の決定要因

阿津坂　祐貴

人文学が物事の「意味」を発見する学問だとすると、（自然・社会）科学は物事の「原因と結

果の関係」（因果関係）とそのメカニズムを発見する学問である。また前者が、「個別」の事例を研究することで物事の真理を明らかにするのに対し、後者は、「全体」の傾向を分析することで、現象の一般的な法則を明らかにするものである。そして、本報告は後者の立場によるものである。

個人の特徴（原因）が人々のヒップホップとの関わり（結果）にどのような影響を及ぼすのかについて、ヒップホップ研究者、社会科学者はともに十分な検討を行ってこなかった。本報告の目的は、アフリカ系アメリカ人個人の間でのラップ消費と評価の違い（ラップを聞く／聞かない、ラップを肯定的／否定的にとらえる）を説明することで、黒人共同体の中で一体「誰が」ヒップホップを重要だと考えているのかを検証することである。1993-94 National Black Politics Study のデータを用いて、本報告はいくつかのデモグラフィックな要素（ex. 年齢、性別）また社会政治的な要素（ex. 政治的立場、宗教度）が、人々のラップ消費と評価に与える影響を分析する。

ロジスティック回帰分析（統計分析）の結果は、年齢、宗教度、黒人文化消費度が人々のラップ消費に影響を及ぼしていることを示している。またそれは、ラップの評価が、年齢、ラップ消費、黒人文化消費度に影響を受けることを示している。ここから本報告では、ヒップホップとはポスト公民権世代の黒人、制度としての黒人教会を用いない黒人、そして黒人文化により精通している黒人にとってより重要な意味を持つことを論じる。

③ トニ・モリソンの小説の物語構造

鵜殿 えりか

モリスンの小説テクストを、《物語の枠組み》というフォルム上の観点と《三角形のきずな》というコンテント上の観点から分析することにより、フォルムとコンテントがどのように相互に共鳴しているかを探った。《物語の枠組み》に関しては、モリスンの創作絵本がイソップ寓話を下敷きにしてそのメッセージを換骨奪胎し、まったく別のメッセージへと作り替えるという構成であることを手がかりにし、彼女の小説においても同じことが行われているのではないかという仮説を出発点とした。

モリスンの小説には、第一作から最新作まで、つねに何らかの《物語の枠組み》が内蔵されている。そのジャンルはおとぎばなし、寓話、民話、映画、小説、歴史、聖書、わらべ歌など多岐にわたるが、必ず何らかの物語の枠組みが存在する。しかしそのあり方は決して顕在的ではない。たとえば、小説『タールベイビー』では、表面上黒人民話が物語の枠組みであるようにみえるが、実際は別の隠された重要な物語の枠組みがあることが判明する。このようにモリスンの小説では、表面上の物語の枠組みは換骨奪胎され、まったく違う物語へと作り替えられる。

物語のコンテントはフォルム上の特徴（物語の枠組み）と密接に繋がっている。モリスンの小説において追究されているのは、社会的な弱者どうしの強い連帯のあり方である。弱者どうしの関係は双数的な関係ではなく、両者の間に第三項の存在が介在している。第三項の存在は、二人にとっては一見何の関係もない、多くの場合「その場限り」の第三者的な存在であるが、相互的にのみ閉じこもる弱者どうしの関係を再生させ、外の世界へと接合させ、永続的なものへと変容させる。またその過程で、家族、血縁、人種、性等による固定化された繋がりが無効にされ、新しい人と人との関係が起ち現れてくる。このような弱者どうしの連帯を《三角形のきずな》として表現した。人間関係の変化とともに物語内容はまったく新しいものへと変化していく。

このように、フォルムとコンテントが相互に共鳴するトニ・モリスンの小説の語りの手法とその文学世界の独自性を検証した。

④ フレデリック・ダグラスとライシーアム

深瀬　有希子

本発表では、フレデリック・ダグラスが 1840 年代から 60 年代にかけてニューイングランド地方で行った講演活動の様子を、同時代に同地で発展したライシーアムという、政治的、文化的、教育的活動とあわせて論じた。今回の発表ではまず、ダグラスが、奴隷制廃止論者であり超絶主義者であったエマソンやソローらと同じ年月日にライシーアムに登場し、演説を行ったという事実を再確認した。

ダグラスの演説にみられる雄弁さについては多くの研究がなされるも、ライシーアムにおけるダグラス、エマソン、ソローの関係は論じられてこなかった。おそらくその理由は、そもそも肝心のライシーアム原稿（オリジナル）が現存しないこと、ダグラス自身がライシーアムについて述べるのは三作目の自伝 *Life and Times*（1881)においてのみであること、さらには、ライシーアム文化の中心人物エマソンが奴隷制廃止運動に消極的であったという伝統的見解が彼とダグラスとの関係を曖昧にした可能性、に見いだせるだろう。

しかしながら本研究では、例えばアンジェラ・デイヴィスによるパフォーマンス批評理論に基づくポピュラー文化としてのライシーアム研究や、レン・グージョンによるエマソンを「戦闘的」奴隷制廃止論者と再解釈する論考をふまえて、ウェンデル・フィリップスやエマソンなどハーヴァード出身の文学者による弁論術と、当時の高等教育における必読書 *Columbian Orator*（1797)を独学でものにしたダグラスによる修辞との関連を指摘した。

報告

会員による出版

古川哲史・三浦誉史加・井上摩紀共訳(ジェフ・バーリンゲーム著)『走ることは、生きること――五輪金メダリスト ジェシー・オーエンスの物語――』（晃洋書房、2016 年）、112 pp.

学会報告

第 7 回トニ・モリスン学会に参加して

森 あおい

2016 年 7 月 21 日から 24 日にかけてニューヨーク市で開催された第 7 回トニ・モリスン学会に出席した。今回のテーマは、「トニ・モリスンと編集者としての役割」(“Toni Morrison & Her Role as Editor”)で、アメリカ国内外から約 100 名のモリスン研究者や出版関係者の参加があり、日本からは黒人研究学会のメンバーでもある木内徹氏、西本あづさ氏、鵜殿えりか氏、宮本敬子氏、森が出席した。

モリスン学会は、1993 年 5 月にメリーランド州ボルチモアで開催されたアメリカ文学会(American Literature Association)で発足した。初代会長のキャロリン・ディナード氏を始めとして創立メンバーの献身的な努力により、小規模ながら、毎回モリスンやモリスンの作品に縁のある土地で開催されるモリスン学会は、彼女の作品をより深く理解する上で重要な情報を提供してくれる貴重な場となっている。また、毎回モリスン自身が出席することも、参加者にとっては大きな楽しみであり、モリスン研究を進める上での大きな励みにもなっていると言える

だろう。

今回の学会では、モリスンがランダムハウス社に編集者として勤務していた時代の功績に焦点が当てられた。シンポジウムでは、アンジェラ・デイヴィスやエドウィージ・ダンティカ、クインシー・トループ等の作家が、編集者としてのモリスンと関わった興味深いエピソードを披露した。またポーラ・ギディングズやシェリル・ウォール、ファラ・ジャスミン・グリフィス等の研究者は、自らがアフリカ系アメリカ人に関する本を出版した体験を踏まえて、モリスンがアメリカの出版業界に与えた影響について論じた。プログラムには、モリスンが編集に関わった、アンジェラ・デイヴィスやゲイル・ジョーンズを含めて計 29 名のアフリカ系アメリカ人作家と延べ 40 冊の本のリストが掲載されているが、これらの作家、作品を世に出した編集者としてのモリスンの影響力は作家としての影響力と同じほど計り知れないものがある。ある意味、モリスンは、アフリカ系アメリカ人作家にとってゴッドマザーとも言える存在なのではないだろうか。

今年の 2 月に 85 歳の誕生日を迎えたモリスンは車椅子での登場ではあったが、まだまだ意欲旺盛にお見受けした。次の作品の完成を楽しみに待ちたい。

訃報

小林信次郎氏　大阪工業大学名誉教授。黒人研究学会代表、顧問として長年ご貢献いただきました。病の為 2016 年 7 月 21 日逝去。享年 85 歳

中島和子氏　元桜美林大学教授。黒人研究学会メンバー。
病の為 2015 年 5 月 26 日逝去。享年 86 歳
なお、旧会員高橋徹氏の奥様から、以下のお手紙とともに中島氏のご著書を献本いただきました。貴重な初版本は事務局にて保管させていただきます。

黒人研究の会　会員様
拝啓　唐突に一冊の書籍を送りさせて戴きました。ご無礼をお許し下さい。
『黒人の政治参加と第三世紀アメリカの出発』の著者中島和子氏は、2015 年 5 月 26 日、86 歳にて腸閉塞のため急逝いたしました。

中島氏は中央大学法学部で、兼任講師としてアメリカ政治論を担当（本務校は桜美林大学）していました頃、中央大学出版局より本著作を出版いたしました（1989 年）。みずから黒人の社会に飛び込み、目で見、体験、研究してきた黒人の政治問題を、総まとめして、渾身の力を込めて書き上げた一冊であります。オバマ氏が大統領になる前後から「あの本は、いま読まれなくてはネ」と説き、初めの出版社に増刷を願いましたが絶版となっていました。同じものを字を少し大きくして、みすず書房より新版として出され、現在にいたっています。

中島氏の没後、書庫を整理していましたところ、初版の本が箱詰めのまま見いだされました。家屋は近々入手にわたるので、資料整理に目下励んでおり、然るべきところへ送り、氏の意志を活かしていただきたいと腐心しております。20 年前に夫が貴会に属しておりましたので古い名簿を繰りながら、先生方から指示を戴き、漸く現在の会の責任者が、加藤恒彦先生であられることに辿り着きました。趣旨をお伝えしお名前を紹介戴きました。ご精読戴けますれば、中島氏にとって何よりの供養とぞんじます。　　敬具

2016 年 9 月　ご遺族を補佐いたしまして　旧会員高橋徹妻　高橋滋生。

会員からの投稿

追悼　恩師　小林信次郎先生

北島　義信

9 月 22 日、事務局長・坂下史子先生より、突然、小林信次郎先生の訃報を受け、驚きました。本年 8 月、集中講義のため四国学院大へお邪魔したおりに、ムアンギ先生との話のなかで小林先生にお会いしようということになりましたが、それも叶わなくなりました。

私と小林先生を結び付けて頂いたのは、横浜の門土社社長・關功氏でした。1970 年代に門土社はチヌア・アチェベの『崩れゆく絆』（古川博巳先生訳、1977）を出版し、グギ・ワ・ジオンゴの名作『一粒の麦』の出版途上でした。その翻訳者は、すでに『アフリカ文学の世界』（コズモ・ピーターサ、ドナルド・マンロ編、南雲堂、1975）を翻訳された小林信次郎先生でした。關社長のお世話で、初めて神戸のご自宅にお邪魔したときに、先生は初対面の私にアフリカ文学の魅力を語られ、さらに別府市で開催される第 25 周年総会での研究発表をお勧めになりました。それがご縁となり、初めて、総会で「世界文学としての現代アフリカ文学」という論題の研究発表をさせて頂くことになりました。先生は気さくに、アフリカ文学・文化に関する多くの貴重な文献を提供され、そのおかげで、私はアフリカ文学研究の本格的なスタートを切ることができたのです。先生はアフリカ研究において、常に真摯であり、『一粒の麦』の翻訳に際しては、実際にケニヤに赴き、グギ・ワ・ジオンゴ氏本人に面会して人名等についての発音を録音され、また小説の背景となる地域も写真に納められました。その成果を、独り占めされることなく皆で共有できるように取りはかられていました。グギの小説に頻出する聖なる「ムグモ（いちじく）」の木の迫力ある姿や日本人には馴染のない人名の発音、例えば Ngugi wa Thiong’o の読み方はグギ・ワ・ジオンゴであること、また、house は西洋風の「家」であり、hut は「小屋」ではなく、伝統的なアフリカ人の家屋を指す言葉であることも、ご教示頂きました。またグギ氏が 1980 年代に来日されたときも、私のために面会の労をとって頂きました。

行動派の先生は 1980 年代の初期に、アパルトヘイト体制下の南アフリカのソエト（ソウェト）に足を踏み入れ、そのすぐれたルポタージュ「ヤモリとドンガは何を語るか—ソエト行から」を『黒人研究』（No. 53, 1983）に書いておられます。デズモンド・ツツ主教の活動に言及したこのルポタージュは、1985 年以降、非暴力・非服従を掲げるキリスト教聖職者たちが一丸となって、闘いの前面に登場するという新たな現実の萌芽を把握している点で非常にすぐれたものです。

小林先生は、会誌編集長として代表として長きにわたって、アメリカ、アフリカ、カリブ地域の黒人文学・文化のみならず、少数民族やアジア系作家を有機的に包含した研究をリードされました。2009 年春に、ムアンギ先生とともにカリフォルニア大学アーヴァイン校で、グギ教授にお会いしたときに、真っ先に、「小林先生はお元気ですか？」と尋ねられました。作家であり教授でもあるグギ・ワ・ジオンゴ氏の心に小林先生の人柄は深く刻み込まれていたのです。小林先生の学恩にお応えもできずに、いたずらに年齢を重ねてきた自己を振り返り、先生の衣鉢を継いで後世のために、アフリカ文学研究のまとめに取り組む所存でございます。先生、本当にありがとうございました。

合掌

黒人文学研究への想い―ある黒人詩人が与えた記憶

古賀　哲男

今年６月末に開催された62回の年次大会はテーマのポピュラーカルチャーもさることながら、海外からの講演者や報告者の多彩な顔ぶれに小生も大いに興奮を覚えたものであり、ますます発展する機運の当学会において、今一度一人の会員として自分自身の黒人研究への想いを以下、僭越ながら綴らせていただきたい。

そもそも白人のアメリカ詩人を研究していた私がなぜ黒人文学や黒人文化を研究しようと思ったのか。その理由は今思えば 1989 年から 1 年間に及ぶ在外研究時に受けたある黒人詩人の講演に遡る。それは A アミリ・バラカ（Amiri Baraka 1934-2014)によるもので、実は彼の教授人事前の学科内講演であったが、なんと講演席の椅子に片足を上げての挑戦的ポーズで行われ、しかも演題がたしか「白人キャノンによる植民地主義的文化と文化革命」というようなものであり、その内容もこれまでの白人作家によるキャノン(ならびに大学教育におけるその永続化)がいかに異人種異文化共生のアメリカにおいて有害なものであり、真の文化教育にとって障害となっているかを数々の実例を引いて訴えるもので、英文科内講演というより、政治講演といった方がいい内容であった（これが引き金となり、彼の教授人事は否決される結果となる[1]）。

この「バラカ事件」は無論きっかけに過ぎなかったが、アメリカの文学研究において 1990 年代は黒人文学文化研究の黄金期といっても過言ではない状況が生まれつつあった。事実、*PMLA* は 1990 年 1 月号で初の「アフリカ系アメリカ文学研究」特集を組んでおり、また 1990 年はニューヨークで最初の黒人市長が誕生した年であり、さらに巷ではスパイク・リー（Spike Lee）監督の映画 *Do the Right Thing*（1989)や Oprah Winfrey Show や Arsenio Hall Show のような黒人エンターテイナーによるテレビ番組が空前の人気を博していた。

それから 25 年以上も経った今、遅ればせながら、ラングストン・ヒューズ（Langston Hughes）についての本をまとめようとしていたり、バラカのみならず、ヒューズ以後の主要な黒人詩人についてさらに研究しようとしている自分の研究を振り返るにあたり、1990 年初頭のアメリカの状況は今なおそのインパクトを与えているようである。そこで今日のように黒人文化文学研究が決して周辺的な研究ではない時代だからこそ、今一度この領域がブームとなることの意味に触れてこの小文を終えたい。

ちょうど日本で言えば、バブル経済の最後の絶頂期であり（1989 年に三菱地所がロックフェラーセンターを購入し、そのスケートリンク前のクリスマスツリーが盆栽に変わるのでは冗談が囁かれていた）、アメリカでもリーマンショック以後の経済状況下の文化からは想像もできないほどの（冷戦崩壊以後の）高揚感が支配しており、20 世紀末の 10 年間はたしかに「アメリカの世紀」最後を締めくくるにふさわしいグローバル化の波が世界中を支配していたように思う（2001 年の同時多発テロに始まる反グローバリズムが恒常化する 21 世紀のような政治的不安定化はそれほど顕在化していなかった）。アメリカ国民の関心は専ら内向きで新移民の人々もみずからのアイデンティティ構築のみに向かっていたと思われる。そんな父親ブッシュ政権からクリントン政権に至る時期、アメリカ黒人の専らの関心は人種の称揚であり、1980 年代からの Black Empowerment 時代以後の New Black Aesthetic が語られていたようだ。今では “Blaxploitation”と呼ばれるような映画が生まれ、モリソン、ウォーカー、ネイラ

[1] 詳しくは、1990 年 3 月 15 日のニューヨークタイムズ記事（Robert Hanley, “Black Poet Says Faculty ‘Nazis’ Blocked Tenure”）参照。

ーらの小説が古典的扱いを受け、ラップやヒップホップなどのストリートカルチャーが大衆文化を席巻するような流れは 1990 年代に加速し、diaspora というような歴史が再考される環境もグローバリズムが恒常化するなかで生まれたように思う。

もし 20 世紀の黒人史が以下のように「要約」出来うるならば（つまり、19 世紀末からの黒人解放運動を受け継ぐ形でハーレムルネッサンス期にそれまでのミンストレル・ショー的黒人イメージを払拭し、1930 年代の左翼的経験においても社会主義的正義が人種意識の高まりに寄与し、第二次世界大戦やその後の朝鮮動乱やベトナム戦争への戦争協力を通じての地位向上、60 年代の公民権運動やその後のブラックパワー運動といった流れにおいて）、post-race とさえ言われる今日的状況の意味は、例えば、バラカのような詩人がとった軌跡（1950 年代のビート・ボヘミアン詩人からブラックアート運動の詩人へ、さらにブラックナショナリズム、汎アフリカ主義、マルクス主義といったイデオロギーに変貌した）が象徴する近年の歴史的決算としての（没イデオロギー的）今日の思想状況の考察を抜きにしても語られえないのであろうし、今後、作家たちの思想的意味を広く研究したく思う[このような雑駁な感想の吐露で黒人文学研究への想いを代弁するのは本意ではありませんが、字数制限もあり、大分乱暴な物言いになってしまいました]。

Zora Neale Hurston のおもわくを探って

古谷　やす子

ゾラ・ニール・ハーストン（Zora Neale Hurston 1891-1960）は、子供時代を黒人の自治が認められた黒人だけの町イートンヴィルで過ごし、町の人が自由に話す様子を目に焼き付け、フォークテイルを耳に残して成長した。彼女は人々が今も昔も変わらず自由に自分を表現していることに気づき、人間は生まれながらに自由だと確信した作家である。しかしながら、人々は日常話すことが、生まれながらの自由につながるとは自覚できず、また、人間は成長するに伴い欲望や劣等感、嫉妬、依存心などを発達させてしまうので、本来の自由な姿が見えなくなると彼女は観察する。彼女の作品には欲望、劣等感、嫉妬、依存心などのモチーフが取り上げられ、人間の本来の姿を知るためにはすべてのものを一旦捨て去らなければならないと彼女は主張する。あらゆるものを捨て去るとは、自分に向き合うことで、誰にも頼らず自分に責任を持つことであり、言い換えれば自立を意味する。ハーストンは、人間は生まれながらに自由であるが、自由であるためには自立する必要があり、本来の自由を知ればとるべき道が自然に分かることを作品に著した人である。

ハーストンのフォークテイル集とされる *Mules and Men*（1935）は、フロリダ出身の黒人がフォークテイルを収集したことに意義があるとされてきたが、なによりも人間には生まれながらに表現の自由があることを示す彼女の観察記録である。この作品はフォークテイル集というよりは、ハーストンのフォークテイル収集の道中の記録であり、イートンヴィルの友達が集まり自由に笑い怒る姿の記録で、夜の酒場でほのめかされる嫉妬も描き出している。そのうえ、人々が語るフォークテイルの内容は自分の自由や平等を侵害されたとき、即座に反発して均衡を保とうとするものである。人々は感情を自由に表し、常に自分の自由と平等を主張していると彼女はこの作品で示そうとしたのである。

ハーストンの傑作とされる *Their Eyes Were Watching God*（1937）は、人種差別や女性差別の観点から、または黒人文化の真正さの点から評価されてきたが、この作品は人間の自

立を描くと考えられる。主人公ジェイニー（Janie）が三回の結婚を経て、自立する意味を理解する話として読める。最初の夫は白人を避け、二番目の夫は白人を真似、三番目の夫ティー・ケイク（Tea Cake）とは相思相愛だが、彼は自分の黒さを卑下し、肌の色の薄いジェイニーを彼より上位に据え、白人を最上位に置き白人に頼ればよいと考える。やがてティー・ケイクが狂犬病で精神が狂い、ジェイニーが彼を射殺せざるを得ない悲しい状況が起こり、彼女は裁判を受ける。ティー・ケイクの友達がジェイニーの味方をすることはなく、彼女は孤立無援で裁判に臨み、ありのままを話したところ裁判員に理解してもらえた。三人の夫が自分に向き合えない人であるのにひきかえ、ジェイニーは独りきりで自分と向き合い自身を語ることにより、自分と向き合うことが自立することだと知るのである。

Moses, Man of the Mountain (1939) は、モーセ（Moses）が奴隷を救い出すことに意味があるのではなく、奴隷経験者に人間の本来の姿を教える物語である。まず欲望や依頼心を取り除けば、モーセが"He felt as empty as a post hole"「支柱の穴のように空虚な感じがした」と表現する本来の自由が感じられると教え、そのとき人間は自然にどうすればよいかが分かるものだという。人間は自然界のものと同様、自然に存在できるものなのだが、欲望や依頼心が自然に生きることを邪魔するのである。

ハーストンは差別法の存在する時代に生き、苦しみ、いかにすれば自由に生きられるかを考え抜いた末、人間の生来の自由と平等に気づき生きる拠り所としたのではないかと考えられる。人間の本来の姿は、時代や場所に関係なく我々が見失ってはならない永遠の真実であり、人間を勇気づけるものである。

セネガル短期留学報告：*Métissages* の国の過去と現在

丸山　峻一

2016 年 5 月 9 日から 6 月 10 日までの約 5 週間、The Ohio State University (OSU)の夏学期の一環で、セネガルに短期留学をした経験を報告する。所属学部である African American and African Studies のシェイク・チャム(Cheikh Thiam)の引率の元、院生を含めた約 25 名が西アフリカのセネガルという遠く離れた異国で、セネガルの文化、歴史、言語を学ぶというのがこの短期留学での目的であった。

"Francophone Africa: Between Tradition and Modernity"というテーマの元、首都ダカールにてホストファミリーとともに暮らしながら、シェイク・アンタ・ジョップ大学(University of Cheikh Anta Diop, UCAD)近辺にある West Africa Research Center (WARC)にて早朝から、文化が複雑に配合されながらも調和をなしている、*Métissages* としてのセネガルの過去と現在について学ぶという非常に密度の濃い 5 週間であった。

私は人生初となるアフリカ大陸への渡航で、期待に胸を膨らませていた。しかし、レオポール・セダール・サンゴール(Léopld Sédar Senghor)国際空港に到着すると同時に、荷物がまだアメリカで足止めを食らっているという状況を知らされ、着いてから二、三日の間は同じ服を着なければならない不運に見舞われた。順調な出だしとは言い難く、一行の重苦しい雰囲気を察したチャムは、授業のスケジュールをずらし、ダカールから 1 時間ほど離れた *Espace Sobo Bade* という隠れ家的ホテルにて週末を過ごすという策を講じた。

週明けからは、各自ホストファミリーの家に向かったのだが、自分はこの短期留学のアシスタントであったセネガル人で OSU の院生のバドゥとアパート暮らしをすることになった。毎朝

授業へは、*Car Rapide* と呼ばれる約 20 人乗りのバスで WARC へと向かう。このカラフルに彩られたバスは、50 フランという格安の値段で乗車できる一方、年季の入った車体が多く、乗客の多い時には、後方の扉にしがみつきながら、目的地へと向かうことも少なくない。登校初日から、高速道路上で、バスの扉にしがみつくというダカールの洗礼を受けた。

毎朝 1 時間は、現地の共通言語であるウォロフ語を学ぶ。首都ダカールにおいて、自分のような外国人に対しては、英語かフランス語で話しかけてくるのだが、現地の人々の間では主にウォロフ語が用いられることがほとんどである。現地で生き抜くため、また、ホストファミリーとのコミュニケーションを円滑にするために、最低限度のウォロフ語を身につけるための授業であった。

ツールとしてのウォロフ語を学ぶ傍ら、その言語の歴史や特性に関しての講義も受けた。セネガル人の歴史家シェイク・アンタ・ジョップ(Cheikh Anta Diop)が言うように、ウォロフ語はヨルバ語同様、古代エジプト文明にその起源があるということ、そして、言語の発展の過程でイスラム文化にも大きく影響を受け、ウォロフ語という言語そのものが *Métissages*、すなわち様々な文化が配合されて一つの形をなした言語として、現在も首都ダカールを中心に、セネガル全土で共通言語として重要な役割を担っているのである。

テーマにもあるように、この留学プログラムでは、セネガルの伝統と近代性の狭間で、人々がどのような文化を構築し、歴史を紡いできたのかということを学んだ。ウォロフ語の授業後のレクチャーでは、各週でさまざまなテーマに沿ってセネガルの歴史を紐解いていった。また、週末は郊外での研修があり、教室の外での学びの場も用意されていた。

最初の週は、セネガルの概要についてのレクチャーを受け、セネガルの生活リズムに適応することが求められた。UCAD で教鞭をとっているママラム・セク(Mamarame Seck)が、15 世紀にポルトガル人が入植する以前の歴史に触れ、セネガル文化が大きく 4 つの影響によって複雑に配合された *Métissages* の文化であることを述べていた。スーフィズム、フランス文化、先住民の文化、そして西洋的グローバリゼーションの 4 つの文化的構成要素でなりたっているのが現在のセネガル文化なのである。

第 1 週のハイライトと言えるのは、ゴレ島の見学であろう。フランス植民地支配の「象徴」であり、アフリカンディアスポラの長い歴史の始まりの場所とも言える島である。おそらく、多くの黒人研究関連の歴史書で目にすることの多いのが、*Maison des esclaves*（奴隷の家）内部のこの写真ではないだろうか。UCAD でセネガル史を教えるイドリス・バ(Idrissa Bâ)がゲストスピーカーとして来た際に、ゴレ島の奴隷貿易施設は隣国の同様の施設、または、セネガルの古都であったサン＝ルイに比べると、規模が小さかったと説明していた。しかし、奴隷貿易の「象徴」として、現在でもセネガルの重要な歴史遺産として考えられている。また、植民地支配によって拍車がかかった人種間の交流の副産物でもあり、その後植民地支配によって創り出された経済的ヒエラルキーの中で地位を確立することになる *Les signares* と呼ばれる、いわゆる混血の女性たちの台頭も、サン＝ルイ同様この島から始まった。セネガル人に対する非人道的搾取の現場であると同時に、*Métissages* としてのセネガル文化が発展した場所でもある。

（奴隷の家）

「動産」としての奴隷を計量するための小部屋、植民者であるフランス商人が若い女性たちを品定めするための覗き窓のある部屋、反抗的な奴隷の懲罰のために設けられた階段下の小さな空間など、当時の歴史を物語るものが多かった奴隷の家の中で、やはり一番印象に残ったのは、建物の奥に見える *La porte du ≪ voyage sans retour ≫*と呼ばれる吹き抜けの扉である。直訳すると、「帰らずの扉」。薄暗い通路の先に見ることのできる海が開放感を醸し出している。それとは裏腹に、その名の通り奴隷たちは一度この扉を出てしまうと、二度とこの故郷に戻ることが許されなかった。故郷から切り離され、家族の絆を分断され、薄暗い小部屋で非人道的扱いを受けてきた西アフリカ人たちが、大西洋を越えて新大陸で長い歴史を紡ぐ、その始まりを象徴するのがこの扉なのである。

翌週は、セネガルの各都市の歴史を紐解いていった。ダカール、サン＝ルイ、チェスなどの都市が、セネガルの文化の発展のためにどのような役割を果たしてきたかについての講義を受けた。週末には、その一例であるセネガル北西部の旧首都であったサン＝ルイに赴くことになった。サン＝ルイ島はセネガル川の河口に位置し、その地理的状況から、ゴレ島同様、フランス植民地支配の拠点となり、大西洋への重要な玄関口であった。現首都のダカールとは、街並みや建物の作りが異なることもさながら、海岸線の風景がまったく違うことに趣を感じた。人々の生活と漁とが一体となっていて、日中の海岸線沿いは活気にあふれていた。

サン＝ルイもまた、*Métissages* としてのセネガル文化が構築されてきた過程において重要な役割を担ってきた。モーリタニアとの国境が目と鼻の先にあるサン＝ルイは、フランス植民地支配よりも以前より、北アフリカからの多様な人種・民族の移民とともに、様々な文化が複雑に混じりあう場所となっていた。また、特筆すべきことは、植民地支配以前に行われていたアジアとの交流により、米の生産方法が伝わり、米が現在のセネガルの主食となっていることである。セネガル全土で一般的に食べられている家庭料理のチェブジェンは、サン＝ルイが発祥の地とされている。魚の煮汁で炊いたご飯の上に、野菜と魚が大きな皿に盛られ、それを家族で囲んで手で食べるというのが、セネガルの家庭の一般的な夕食の風景だろう。セネガルの伝統料理が、植民地支配以前の文化の交流によって生み出されたものであることを、味覚からも感じられたのがサン＝ルイであった。

また、近代性という点において、フランス植民地時代、サン＝ルイは他の先進国にも引けをとらない技術を有していたということを学んだ。当時、世界に３機しかなかったという最新鋭の蒸気機関の搭載されたクレーンが河川敷にそびえ立ち、存在感をひときわ放っていた。また、街の中枢にあり、セネガル川を股がる *Le Pont Faidherbe* という橋は、エッフェル塔や自由の女神の建設にも携わったギュスターブ・エッフェル(Gustave Eiffel)の手がけたものでもある。これらのサン＝ルイに点在する技術の結晶の根底には、西洋世界によるセネガル人をはじめ、多くのアフリカ人の労働や人命の搾取があったということ忘れてはならない。しかし、これらの建築物も、現在では文化が複雑に混じり合った *Métissages* の街であるサ＝ルイに、一つの風景として溶け込み、人々の生活の一部となっているのである。

（蒸気機関の搭載されたクレーン）

第 3 週からは、セネガルの宗教をテーマに講義を受け、週末のトゥーバの見学に備えた。人口の約 90%以上がイスラム教徒のセネガルでは、その一つの宗派であるムーリッド教を

信仰する人も多く、トゥーバはその聖地である。創始者のアマドゥ・バンバ(Amadou Bamba)が埋葬されており、西アフリカ最大であるモスクは、外装の修繕中だったため、少し本来の姿とは違うが、内装の荘厳さには目を見張るものがあった。また、普段は閲覧することのできない、付属の図書館にも入ることができ、創始者の現存する最初で最期の一枚の写真を拝むこともできた。

イラスム教信者が大多数の国であるセネガルではあるが、キリスト教も重要なセネガルの文化的構成要素の一つである。翌週の週末には、ダカールから南東に位置するジョアルを訪れた。1930 年代前半からフランス語圏内で黒人固有の文化を賞賛する文学運動であるネグリチュードの生みの親であり、1960 年にセネガル独立後、初代大統領となったレオポール・セダール・サンゴールの生まれた土地でもある。セレール族の住む村であり、イスラム教とキリスト教とが調和を保ちながら共存しており、独特の文化を築き上げてきた。村の離れにある墓地では、イスラム教徒もキリスト教徒も同じ敷地内に埋葬されており、宗教の違いを越えて一つのコミュニティを形成するというセネガルの *Métissages* としての文化の象徴とも言える街である。

この短期留学中、セネガルという国の文化を肌で体験し、その歴史を紐解いてみると、サンゴールの描いていた文化構想がこの国の過去、そして現在をつないでいることを感じた。引率教員チャムの著書 *Return to the Kingdom of Childhood*（2014)によれば、サンゴールの哲学の根底にある *Métissages* の概念、つまり、一見純粋なアフリカのルーツというものも、実は様々な人間の文化の共存から成り立ったイデオロギーであるというものである。多種多様な人々間の交流によって構築された独特のセネガル文化は、サンゴールの *Métissages* の文化構想そのものであり、現在のセネガルの文化もグローバル化の影響により様々な異文化を取り込みながら、発展を続けている。今回あまり触れることはできなかったが、ポップカルチャーのレベルでは、アフリカンアメリカンの文化の影響により、サン＝ルイでは毎年大きなジャズのフェスティバルが行われる。また、セネガル第 3 代大統領アブドゥライ・ワッド（Aboulaye Wade）の政策に対する反対運動であるヤナマール運動を牽引したヒップホップグループのクルギ（Keur Gui）なども、アフリカンアメリカンの音楽とその政治的イデオロギーの影響を大きく受けていると考えられる。さらに、近年の中国のセネガル進出も、今後のダカールの風景に変化を与え、セネガル固有の文化に影響を与えていくにちがいない。常に変化を続ける *Métissages* としてのセネガル文化を、長いスパンで見続けていきたいと思わされるきっかけをくれたのが、この 5 週間の短期留学であった。

＜－（西アフリカ最大の
トゥーバのモスク）

退　会　者

藤岡　住恵

入　会　者

堀　智弘（ほり　ともひろ）
所属：弘前大学人文社会科学部（准教授）
自己紹介：これまでアフリカ系アメリカ人文学のなかでは、Frederick Douglass を中心に slave narrative について研究してきました。三年半ほど留学したルイジアナ州立大学では、カリブ海・南部文学の専門家である John W. Lowe 教授（現在はジョージア大学）のもとで主に同時代の環大西洋圏の思想史的な背景からダグラスについての博士論文を執筆しました。現在は特に、十九世紀米国社会の世俗化と市場化のなかでの slave narrative の発展について関心をもっています。みなさまから色々とご教授いただけましたら幸甚です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

磯部　翔平（いそべ　しょうへい）
所属：上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科地域研究専攻博士前期課程
自己紹介：私の研究テーマはブラジルにおける白人と黒人間の人種関係/意識、そしてアフロ系ブラジル人の闘争の歴史です。アメリカ留学時代に African American Studies を専攻し、その際にアメリカ合衆国南部ではジムクロウ法による公式な形での人種隔離政策が行われていたのに対し、同じく奴隷貿易により数多くのアフリカ人奴隷を輸入したブラジルでは人種民主主義なる概念が誕生していたことを学び、ブラジルの人種関係と黒人史に興味を持ちました。研究テーマはブラジルに関してなのですが、合衆国とブラジル両国の人種関係に関心があるので入会させていただくことにいたしました。どうぞ宜しくお願い致します。

（順不同）

＜編集＞　黒人研究の会・編集部
〒603－8577　京都市北区等持院北町 56-1
立命館大学文学部・坂下史子研究室気付

＜編集者＞　井上　怜美

ホーム・ページアドレス
http://home.att.ne.jp/zeta/yorozuya/jbsa/